

下北沢文士町：類例のない文学都市

北沢川文化遺産保存の会 主幹 きむらけん

二大巨匠が住んだ文士町

文士が多く集ったところは文士村と呼称する。代表例が馬込文士村であり、田端文士村である。村と言う場合、中心人物がいる。前者の場合は尾崎士郎であり、後者の場合は芥川龍之介である。ところがこれら文士が多く集った村は、かつての歴史としての文士村であり、文化旧跡としての村である。

一方、当下北沢文士町である、きっかけは1927(昭和2)年に開通した小田原急行鉄道だ。武蔵野を貫くこの鉄道は人を惹きつけた。まず翌1928(昭和3)年小説の神様と言われる横光利一が阿佐ヶ谷から転居してきた。雨過山房と称された居宅には多くの文士たちが集まってきた。町形成の母胎を作ったのは彼である。その横光利一は1947(昭和22)年49歳の若さで亡くなる。当地ではもう一人の巨匠がいた。1942(昭和17)年に当地で亡くなった萩原朔太郎である。この二人の巨頭は文学を志す者たちの精神的支柱であった。

この文士町には文学精神として彼らの陰翳がいまだに生きている。とくには萩原朔太郎だ、現代詩人の吉増剛造は「下北沢には至るところに次元の穴が空いている」という。萩原朔太郎の魂魄が今に生きていて、町の随所にその気配が看取されるという。

下北沢には不思議な魅力がある。この街の形成に大きく関わったのが鉄道である。まず小田急線が敷設された。さらに1933(昭和8)年井の頭線が開通し二つの鉄道がここで交差した。この形状に着目したのが小説家清水博子だ、小田急線をY軸、井の頭線をX軸に見立て、形がいびつであることから「ひしゃげた座標軸」(「街の座標」)と評した。このゆがんだXが当地の秘められたシンボルだった。しかし、交差を象徴する街の座標は2013(平成25)年3月に小田急線が地下化したことで姿を消した。それでも下北沢は鉄道交差都市であることに変わりない、四方向から人が来られるという点はこの都市の優れた機能である。

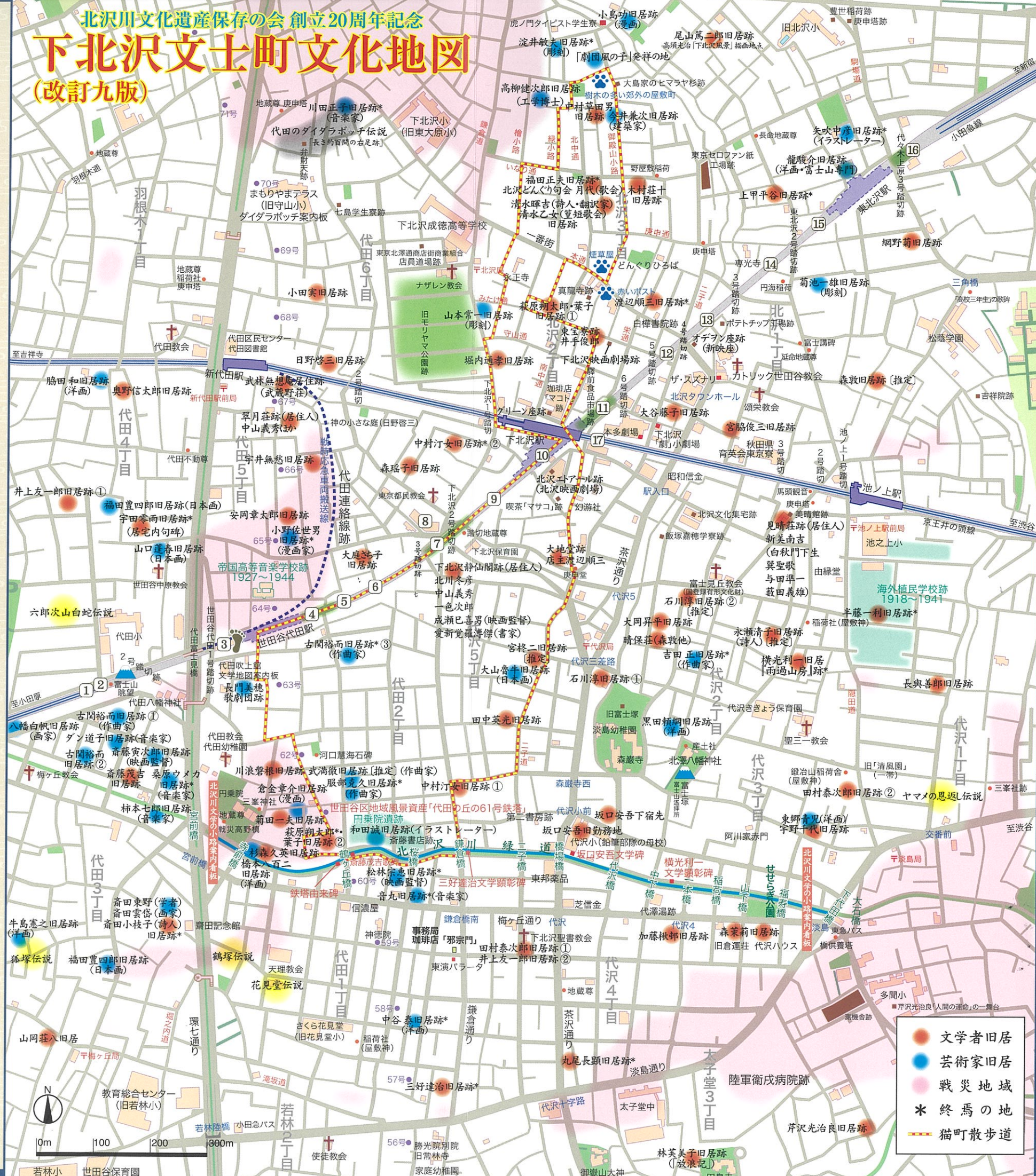
鉄道交差Xが文士町形成の原動力

下北沢の鉄道交差が人や価値を集めた。教会もまた寮も多く集まっている。教会が一带に十幾つもある、なぜ当地に教会を建てたのか。その答えは下北沢の利便性である、四方向に張り巡らされた鉄道がクロスするところは信者も来やすい。かつては会社や学校の寮が密集していた。交通の利便性の高さは寮を置く場合好都合だった。これに加えて言うと下北沢が人を惹きつけたのは副都心との距離である、渋谷、新宿へはほどよく離れている。言えば間なのである、国木田独歩が「武蔵野」で言うところの核、都鄙境なのだ。都心より一歩置いた場は間合いがある、自由空間である、想像を奔放にし、創作力が刺激される場である。

歴史を語ると下北沢は昭和期においては詩人密集度日本一だった。文学の根本は漂泊である、四方八方から集まってきた詩人が出会って別れる地点であった。言えば漂泊者の交点だったのだ。

文士町に人を集めたのは近代の機械だ。町の由来はここにある。文学者を集める推進役を果たしてきたのは鉄道だ。人は気まぐれだ、電車に乗って来てふらりと降りる。すると「なんだおまえも来たのか!」と声がかかる。全国的にも稀な現役文学・文化都市である。

北沢川文化遺産保存の会 創立20周年記念 下北沢文士町文化地図 (改訂九版)



新しい町の胎動 下北線路街と幻影の『猫町』

下北線路街案内

小田急線地下化に伴い線路跡地を開発して生まれた各所を案内する。

- ① 代田富士356広場
- ② 世田谷代田キャンパス
- ③ ダイグラボッチの駅前広場
- ④ 由緑別邸代田
- ⑤ 世田谷代田仁徳保育園
- ⑥ ポーナストラック
- ⑦ シモキタ雨庭広場
- ⑧ シモキタカレッジ
- ⑨ NANSEIPLUS
- ⑩ シモキタエキウエ
- ⑪ 駅前広場
- ⑫ 下北線路街空地
- ⑬ reload
- ⑭ ADRIFT
- ⑮ MUSTARDHOTEL
- ⑯ 大山みはらし広場
- ⑰ ミカン下北 (井の頭線高層下新施設)

シモキタザワ猫町散歩案内

萩原朔太郎が歩いたであろう路地道を案内する(部)。小説『猫町』でいうところの「煙草屋」、「赤いポスト」、「樹木の多い郊外の屋敷町」などをたどる。路地の角々で立ち止まっては詩人を想像するのも楽しい。見所は地域風景資産「代田の丘の61号鉄塔」である。

- 文学者旧居
- 芸術家旧居
- 戦災地域
- 終焉の地
- 猫町散歩道

(世田谷文学館 2009年発行)



下北沢文士町には今もお文学的精神が生きている。なかんずく萩原朔太郎の存在が大きい。永遠の漂泊者と言われる彼は当地で生を終えた。さすらいを終えた地点である。が、彼の魂は今も生きてさ迷っている。三好達治は、『師よ 萩原朔太郎』で詩人の行状を見事に描いている。「あなたはまるで脱獄囚のように、或はまた彼を追跡する密偵のように／恐怖し 戦慄し 推理し 幻想し 錯覚し／飄々として影のように裏町をゆかれる」と。その裏町は、代田や下北沢の入り組んだ路地に違ひなからう。朔太郎はこの当地で『猫町』を書いている。副題に「散文詩風小説」とある。虚構だが読むと彼が親しんだ境界の路地道が浮かんでくる。代田や下北沢の路地をひっそりと猫のように歩いていた詩人がありありと想像されるのである。

■ 萩原朔太郎 (世田谷文学館蔵)

朔太郎下北沢へ

1929(昭和4)年、東京の盛り場では映画『東京行進曲』の主題歌がどこもこも鳴り響いていた。とくには「いっそ小田急で逃げましょうか」というフレーズが有名になった。好き合った男女が開通したばかりの当線でひっそりと駆け落ちしていく姿が想像された。その小田急は1927(昭和2)年に開通したばかりだ、武蔵野を突っ切っていく新鋭鉄道は人気が高かった。1931(昭和6)年7月彼はその小田急線の東北沢に妹とともに越してくる。

前年7月に医師である父親が亡くなった。その前橋には二兄と実母とを残していた。この父の死を契機に一家を挙げて東京に住むことを決めた。その居住地に小田急沿線を選んだ。

東北沢に仮住まいをし、ここを拠点に家を探し下北沢に家を見つけた。9月、下北沢1008番地に二兄と母ケイ、妹アイとで一家で暮らし始める。駅から近い木造二階建ての一軒家である。所帯を構えたことが創作にも好影響を与え、詩作も多くなった。『恋愛名歌集』はこの年に出版されている。朔太郎46歳だった。



下北沢の家 (世田谷文学館蔵)

翌1932(昭和7)年1月1日自己の感懐を「新年」と題して詠んだ。これは『氷島』に収録されている。「見よ! 人生は過失なり。／今日の思惟するものを断絶して／百度もなほ悔恨を新たにせん」と詠んでいる。苦悩は深い、それでも彼は日々活動を続けていた。この頃考えていたのは自身が設計した新居である。

今のは借家で落ち着かない。加えて下北沢を突っ切る帝都線の工事が始まった。これを機に新居構想を具体化させた。彼にはモデルとする家があった。山田淳設計の家である。特徴のある家だ、この新居をどこに建てるか考えを巡らせた。彼は近隣をよく歩いていた。恐らくそのときに好ましい土地を見つけたのだろう。鉄塔が聳え立つ丘上の土地、世田谷代田1の635番地である。ここに自らの設計になる家を建てた。



・代田の丘の61号鉄塔 (世田谷区地域風景資産)

世田谷代田へ

萩原葉子は父が代田に家を建てるに至った経緯について触れている。父が一番気に入っていたのは成城学園前と世田谷中原(代田)だったという。結局は「中原の方に、駅から七分の小高い所に空地を見つけ、百五十坪借りたのだった」(『父・萩原朔太郎』)。私は成城学園前というのには違和感を覚える。道が広くて隠れるところがない。代田とはまるで違う、非『猫町』的であるからだ。

朔太郎自身、選んだ土地が気に入った、「庭前一円、世田谷の平野が展開していますので、東京としては飛騨の郊外の感じですよ」と友人への手紙に書いた。ここに建てられた家は「中世の城と寺院とを取りまぜたような急勾配の屋根が高く見え、遠くの方からもすぐそれと分かった」(『葺麻の家』萩原葉子)という。家のすぐ北側には高圧鉄塔駒沢線の61号鉄塔が聳え立っていた。当時緑の繁茂する丘上に建った人工物は「何かの幻想的な、しかも朝のような鮮やかな気分を感じさせる」(『新しき欲情』:『幻影の都会』)ものとして詩人の目に映った。実際彼は、この鉄塔とのシンメトリーを考へて家を建てた。来訪者の何人かが印象的なこととして鉄塔と尖った三角屋根の家との調和を指摘している。

『氷島』編集そして出版

鉄塔の下の二階の書斎で彼は『氷島』の推敲に励んだ。精魂をこめて『氷島』を編んだ。詩全体の配列もここで為して完璧に仕上げた。序の末尾に「昭和九年二月」とある。編集を終えて6月に第一書房から出した。この序文でこう述べる。

著者は「永遠の漂泊者」であり、何所に宿るべき家郷も持たない。著者の心の上には、常に極地の侘しい曇天があり、魂を切り裂く氷島の風が鳴り叫んで居る。さうした痛ましい人生と、その實生活の日記とを、著者はすべて此等の詩篇に書いたのである。

その場面が想像できる、季節は2月、冬である、詩人は二階書斎で執筆をしている。戸外のすぐ上には鉄塔線の12本が季節風に煽られて風切り音を発している。碇子からはジジリリと青い火花が出ている。詩魂が刺激される。詩人の「心の上には……魂を切り裂く氷島の風が鳴り叫んで居る」と言う。故郷前橋は利根川上流、高圧線の故郷でもある。ここで起こされた電気が東京に送られていた。その故郷と繋がった高圧線がうなっている。頭上に彼はその気配を感じている。Gペンがまるで電気を帯びたように原稿用紙上を滑っていく。詩魂が乗り移ったその作品には自信があった、『氷島』序の末尾で読者にすべての詩編を「声に出して読むべき」と「朗吟」を推奨している、詩人の吉増剛造はこれを読み上げると聞こえない音楽が聞こえてくると言う。不思議なリズムが隠されている、高圧線鉄塔が奏でた音が秘かに言葉の隅々に隠されている、それが詩人の魂の叫びなのか。

小説『猫町』と下北沢

翌1935(昭和10)年50歳になった彼には充実した年であった。4月には『純正詩論』を、10月にはアフォリズム第三集『絶望の逃走』をそして11月には、小説『猫町』を刊行した。これは「散文詩風の小説」と副題が付けられている。まず、なぜ『猫町』か、作品は前段と後段とに分かれる。後段のクライマックスでは北陸のとある田舎町で猫、猫、猫、猫……「世にも奇怪な、恐ろしい異変事」猫の大集団に遭遇する。表題はここに起因する。

ただ後段は前段からの帰結である、『猫町』冒頭では旅観が述べられる、「どんな旅にも興味とロマンスを無くした」と。それで旅は近隣の散歩で済ませた、「私は書き物をする時の外、殆ど半日も家の中にいたことがない。どうするかといえば、野良犬みたいに終日戸外をほっつき廻っているのである。そしてこれが、私の唯一の『娯楽』でもあり、『消閑法』でもある」(『秋と散歩』)と述べる。『猫町』では医者に勧められ健康保持のため自宅から三十分か、一時間ぐらいの散歩をする。代田の自宅から下北沢は頃合いの距離にある町だ。その散歩中に起こった、「樹木の多い郊外屋敷町を、幾度かぐるぐる巡ったあとで賑やかな往来に出た。それは全く、私の知らない何所

かの美しい町だった」、彼は希有な体験をする。「かつて私は、こんな情趣の深い町は見たことが無かった。一体こんな町が、東京のどこにあったのだろう。私は地理を忘れてしまった。しかし時間の計算から、それが私の家の近所であること、徒歩で半時間位しか離れて居ないいつもの散歩区域」に違ひなかった。具体的イメージすれば下北沢に他ならない。代田に移る前に慣れ親しんだ町である。美しい町と思ったその町は、「気がついてみれば、それは私のよく知ってる、近所の詰まらない、有りふれた郊外の町」だったと。

下北沢はなぜ『猫町』なのか。三好達治は朔太郎の姿を「飄々として影のように裏町を行かれる」と形容した。下北沢は、回遊の町、路地の町、孤高の人がひっそりと歩くには好個の場である、猫のように歩いて行く姿は似合っている。路地町はやはり猫的である、孤独で猜疑心が深く、「幽愁の鬱塊」がさ迷うにふさわしいと思えるのである。

朔太郎の死

萩原朔太郎は1942(昭和17)年5月11日未明に代田の自宅で死去した。死ぬ直前「苦しい、苦しい、苦しい」とうめきわめいた。その声を聞いた隣に住む代沢小の小学生は、怖くて怖くてその声が聞こえないように蒲団を被ったという。詩人が発した最期の声は一人の子どもに深く突き刺さった、その恐怖を今も覚えている。「苦しい、苦しい、苦しい」は彼の最後の詩であったともいえる。想起されるのは『氷島』の「告別」だ、「汽車は出発せんと欲して／すさまじく蒸気を噴き出し／裂けたる如くに吠え叫び／汽笛を鳴らし吹き鳴らせり。」とある。

漂泊者は今はの際になって天国に旅立つ汽車に乗ったのかもしれぬ。すさまじく蒸気を噴き出し、苦しい、苦しいと吠え叫び、そして夜闇に響きわたる断末魔の声を発し、遠い彼の地へ旅立って行った。

北沢川文化遺産保存の会

会長：谷亀 緑郎
 当会関連ブログ：発行者 きむらけん
 東京荏原都市物語資料館：http://blog.livedoor.jp/rail777/
 事務局：珈琲店「邪宗門」
 〒155-0033 世田谷区代田1-31-1 TEL:03-3410-7858(水・木定休)
 『下北沢文士町文化地図』(改訂9版) 総発行部数 9万部
 発行：2024年3月20日 著作：きむらけん
 助成：世田谷ファンド 協賛：東邦薬品株式会社
 編集委員：作道敬子、米澤邦頼、山本裕、幾田充代、田島哲夫、奥谷民雄、湊晴美、きむらたかし(協力)
 印刷：株式会社 オビカ
 発行者：北沢川文化遺産保存の会
 (写真・地図を含む一切の無断転載を禁ず)
 協力：世田谷文学館
 〒157-0062 東京都世田谷区南島山1-10-10
 TEL:03-5374-9111 FAX:03-5374-9120
 萩原朔太郎をはじめ世田谷ゆかりの作家に関する資料の収集、展示。



※本活動は「公益信託 世田谷まちづくりファンド」の助成を受けています。

イラスト：大久保良三「萩原朔太郎代田の家」